

人付き合いもどこか鈍感であったほうがいいそうである。敏感過ぎると相手の嫌な面や欠陥部分がすぐにわかり、嫌いになる。「運、鈍、根」のみつつめの根は根気の根である。何事にも諦めずに粘り強く、根気よく取り組まなければいけない。この「運、鈍、根」が成功の秘訣だそうである。そういわれて成功した人を観察すると、なるほど「運、鈍、根」が揃っている人が多いようだ。知らず知らず

身に付けているのかもしれない。あるいは、持って生まれたものなのかもしれない。

わたしの場合はどうだったのか。演劇しかやるのがなかったような気がする。演劇人の要素には絵画力もいるし文章の力もいる。また音楽への感性も

映画監督の統括力

求められる。演劇が総合芸術といわれるゆえんである。芸術かどうかは別にして、総合力はい

画性、音楽性が総合した統括力のすごさである。どの黒澤映画でも人間が生きて立ち上がり動いている。黒澤明の映画が嫌いという人も、これは認めている。

わたしは少年時代、小津安二郎監督の映画が好きになれな

った。というか、どこがいかいのか理解できなかった。チャンバラもなかったし登場人物もおとなしい人ばかりだし、会話もほとんどが日常会話であった。娘を嫁にやる老いたる父の心境を少年が理解できるはずもなかった。後年、小津安二郎に関する

評伝や一代記を読むと「なるほどな」と納得させられるが、やはり小津調にのめり込むことはない。

山田洋次監督は小津調の後継者であるという人もいるが、言語感覚や色彩感覚がまったく違うような気がする。やはり、山

田洋次監督には「寅さん」がいなくてはならない。高倉健さんとの映画もあるが「これは、どこかで見たなあ」という印象であった。西部劇だったのかもしれない。山田洋次監督には渥美清である。こんな話がある。戦で家を焼

かれた村の少年2人が旅に出る。道がふたつに分かれている分かれ道にさしかかる。2人は右と左、どっちの道を行くかをじゃんけんで決める。2人は右左別々の道を行く。運命の分かれ道である。1人は温厚な商人に拾われる。もう1人はやくざの親分に拾われる。それから、2人はどうなったか。やがて国の政治抗争で2人は相まみえる。歴史が2人の顔に刻まれている。

1人を高倉健さん、もう1人を渥美清さんでやってくれるならシナリオを書きたいと映画会社の人に話したことがあった。簡単ではなかった。女の分かれ道は複雑で怖い。
(松浦市出身)